

日本記者クラブ会報

第212号
1987年
10月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 110
電話 五〇三一二七三二(代)

会員の入会審査について

会員資格委員長 渡 辺 恒 雄

資格委員会では毎月会員の入会を慎重に審査しているが、時に資格のない人に対し、有力な基本会員の推薦署名があり、それをお断りするのに苦勞している。

資格審査を従来より厳しくせざるを得なくなった理由については、これまでも会報(昨年七月十日号「会員数の急増を抑制へ」)でお知らせしてきたが、今年になって、審査内規につき理事会の委嘱に基づき、資格委員会でも重ねて審議してきた。

OBは会員経験を重視

その結果、特に「個人D会員」について、「これまで当クラブの基本、

個人A、B、C会員の経験があり、法人会員社に二十年以上勤務し、最近五年以内に退職した者」を有資格者の原則とするほか、幾つかの入会を不可とする条件を明確にした。また、「法人賛助会員」の「マスコミ

関連企業」の定義も、最近のニューメディア時代になって、かなり複雑な要素が出てきたので、「法人会員社の系列企業で、報道活動に密接な関連のある事業を営み、また定款第四条の目的に沿う法人」と規定するなど、制限を強化せざるを得なくなった。

このように、入会審査基準を厳しくした理由について、次のような点を会員各位にご理解いただきたい。

定款の「目的」を原則に

日本記者クラブでは、過去十年間に会員数が倍増し、施設を若干拡張したものの、最近の都心の地価暴騰等の中で、会合場所としては地の利

がきわめて良くなったため、利用者は一層増加し、このままでは会員の十分な利用すら不可能になる。といって、さらに施設を拡張する財政的余裕もない。有楽町の外人記者クラブでは、数百人がウエーティング・リスト登録にされ、入会許可を待っているというが、それは、いわゆるワーキング・プレス以外に入会を開放し、都心の社交場となり、相当の会費をとつてもなお満員状態にあるからのものである。

日本記者クラブは定款第四条の「目的」で、「この法人は、内外の重要ニュース・ソースとの接触を多角化し、報道機関相互の交流を緊密化

することにより、その活動の促進と社会的機能の向上、発展をはかり、ジャーナリズムの職業倫理向上につとめることを目的とする」と定められており、これを入会審査の大原則としたうえで、この目的と何の関係もないか、もしくは、この目的に反するようなことに施設を利用されないようにして、有資格者の入会を制限しないですむようにする必要があらうと思う。

また、内外のVIPを招く関係上、その安全保障面から、会員の審査を厳重にする必要がある。かつて、ズサンな審査によって入会した外人会員が、詐欺事件で警察に逮捕されたこともあり、「記者クラブの閉鎖性」という一般的な批判はあるが、会員に一定の品位を求めるのは当然のことと思われる。

入会希望者の推薦にあたっては、以上の点を考慮し、疑問があれば事務局にあらかじめ適格要件を尋ねる等をしていただきたい。委員会としては、入会を拒否せざるを得ないケースをできるだけ少なくしたい気持ちから以上をお願いをし、会員各位のご理解を求める次第である。

拠出口数で協力を 法人会員社に要請

第127回理事会

日本記者クラブ理事会は九月二十八日、法人会員の口数基準や入会資格の審査内規などに関する重要案件を審議した。

その結果、法人会員の口数基準については、昭和五十一年設定の現行基準をもとに、とりあえずこの基準



「スカンジナビア・ツデー」の開催を発表するフィンボゴドチル アイスタンド大統領 (9.16)

に達していない会員社に対し、基準達成を要請することになった。

また、現行基準そのものについても必要があれば見直す、新設の民放各局に対し積極的に加入を呼び掛ける、などの方針を決めた。

法人会員が口数に応じて拠出する会費は現在、全会費収入の二分の一以上を占め、クラブ会計を支える重要な柱になっている。

一方、入会資格の審査内規については、本号フロント・ページに掲載の渡辺恒雄会員資格委員長の寄稿どおり、引き続き入会審査を厳正にすることになった。推薦をされる基本会員の方々には、この趣旨を十分にご理解いただくようお願いする。

この日の理事会ではまた、昭和六十三年度日本記者クラブ賞の募集・選考をこれまでどおりの規約・内規に従って進めることを決めた。

詳細は次号でお知らせするが、十月上旬に基本会員と個人D会員にあてて実施要領を送付、来年一月末の締め切りで推薦をお願いし、推薦委員会、選考委員会の審議を経て、四月の理事会で決定、五月の通常総会で授賞の運びとなる。

クラブ行事は、九月中旬ころからにわかに立て込み、月末までに、昼食会は盧泰愚韓国国民正党総裁と後藤田官房長官の二回、記者会見はパブリアス・ギリシャ外相、フィンボゴドチル・アイスランド大統領、パンゲマン西独経済相の三回、それに新シリーズ研究会「土地を考える」の第一回として清水国土庁官房長と、切れ目なく続いた。

さらに十月に入って、米国・北朝鮮訪問から帰国したばかりの土井たか子社会党委員長を迎えて昼食会、その日の午後にはニューリーダーのトップで宮沢蔵相、翌日には竹下幹事長、一日置いて次が安倍総務会長の順で、それぞれの政見を聞く記者会見を催したほか、「日米」シリーズの十回目として米国人弁護士ザルム氏、さらに今年二度目の遠出企画として横浜「みなとみらい」の見

学、などを実施した。

いずれも会員多数の参加をえて盛況だった。とくに盧泰愚総裁の昼食会は、直前になって案内し、しかも土曜日だったのに、会場があふれるほどで、韓国側はもとより総裁自身もご満悦のようだった。

九階受付では必ずご署名を

さて、気候もよくなったせいか、クラブの会議室を利用する各種の会合が増え、レストランやラウンジも大いに賑わっている。ご同慶のいたりだが、そこで事務局からお願いを。

レストランを利用される会員にはテーブルに備え付けのスタンドに会員証を挟んでいただくことにしており、おかげでこの規則はかなりよく守られている。ただ、ラウンジ利用の会員と同伴者の方々に、受付の記帳簿に署名していただく点は、残念ながら徹底しているとはいえない。

クラブの品位と規律を保つため、会員制のクラブならどこでも設けている規則である。ぜひ、面倒くさがらずにご協力願いたい。

(事務局長 下田進一)

会議報告

第41回施設運営委員会

(9・7 第2会議室)

NHKの根津武夫氏から原孜郎氏への委員交代を事務局から報告。

明治・大正ニュース事典の購入を決定した。また九階会議室、記者会見室の壁紙の張り換えを早急に行うことにした。

出席 犬養委員長、佐川、原、和田、小松原、宮地、甲斐原、野田の各委員。

第148回企画委員会

(9・9 大会議室)

行事報告の後、研究会「土地を考える」について、小委員会での検討結果を事務局から報告・説明した。クラブゲストとして米因州議会議員一行、宇宙開発事業団の大沢弘之理事長を招くことを決定した。

出席 細谷委員長、山岸、井上、佐藤、高野、高阪、武藤、浅野、林の各委員。

第84回会報委員会

(9・16 第2会議室)

八、九月号および記録版について意見を交換した後、十月号の編集について協議した。

出席 深川委員長、林、三好、松井、東郷の各委員。

第121回会員資格委員会

(9・17 第1会議室)

共同通信の林雄一郎氏から金子敦郎氏、NHKの玉井賢二氏から山本孝氏への委員交代を事務局から報告した。十月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長、松下、小池、播谷、金子、山本、青木、埜邑の各委員。

第40回総務委員会

(9・28 記者会見室)

一、法人会員の口数基準について 理事会(62・4・27)の委嘱にもとづき、標記について検討した結果、次のような意見が示された。(1)プレスセンターへ移転当初(51・10・1)、各社に依頼した引き受け口数に達していないところに対して、再要請をする必要がある(2)会員の口数の増減については、総務委員会の議を経ることを慣行とする(3)新規入会の法人会員の口数については、新聞の場合には新聞協会、放送の場合は民放連各事務局の意見も参考にして、引き受け口数を理事会で決定する。(1)について理事会の決定を得ることにした。

一、サンケイ新聞の口数増について サンケイ新聞社によるフジ新聞社の吸収・合併にともない、同社から、フジ新聞が従来負担していた口数一口をサンケイ新聞が追加負担することにより、フジ新聞の会員を一括移籍したいとの申し入れがあった。審議した結果、定款に従いフジ新聞社の退会を認め、サンケイ新聞社の申し入れを了承、理事会へはかることにした。

一、昭和六十三年日本記者クラブ賞 クラブ賞規約と内規に従い、六十三年度クラブ賞を実施することを了承、理事会へはかることにした。

一、昭和六十三年日本記者クラブ賞 クラブ賞規約と内規に従い、六十三年度クラブ賞を実施することを了承、理事会へはかることにした。

出席 渡辺委員長、細谷、犬養、吉原、山田、泉の各委員、新井理事長、中江、常盤両副理事長。

第127回理事会

(9・28 記者会見室)

一、会員の入会審査方針・内規 渡辺恒雄会員資格委員長から、標記について委員会の検討結果が答申され、これを承認した。(一ページ参照)。

一、会員の入退会 フジ新聞社の退会とサンケイ新聞社の引き受け口数の一口増を承認した後、十月一日付の会員入退会を、会員資格委員会の答申通りに決定した。

一、法人会員の口数基準に関する件 渡辺襄総務委員長からの答申を受け、口数負担の未達成社に対して、理事長名の文書で再要請することを決定した。

一、昭和六十三年日本記者クラブ賞の実施に関する件

例年通りクラブ賞規約・内規に従い、日本記者クラブ賞を実施することを承認した。

出席 新井理事長、中江、常盤両副理事長、渡辺(襄)、渡辺(恒)、細谷、犬養、米、堀井、吉原、高橋、堀、山田、泉、中根の各理事、角田監事。

「土地を考える」スタート

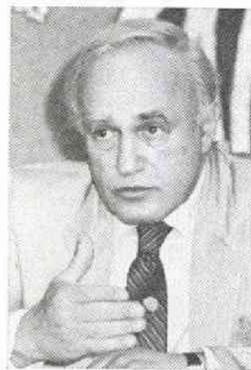


土地問題のシリーズ研究会の第一回は、講師に国土庁の清水達雄官房長を招いて行われた。

「土地を考える」スタート
土地問題のシリーズ研究会の第一回は、講師に国土庁の清水達雄官房長を招いて行われた。
「土地を考える」スタート
土地問題のシリーズ研究会の第一回は、講師に国土庁の清水達雄官房長を招いて行われた。
「土地を考える」スタート
土地問題のシリーズ研究会の第一回は、講師に国土庁の清水達雄官房長を招いて行われた。

ク ラ ブ ゲ ス ト

K・パプリアス ギリシャ外相



観光と資本・技術移転の歓迎ばかりで、緊迫感の乏しい、会見だったが、ロイターの記者の質問が光った。それは、バルテノン神殿の彫刻返還交渉に関する質問が二つ続いた後であった。

「英国もわが国とともにEC、NATOの加盟国で、関係は良好で摩擦はないが、あれらは盗まれた(stealer)もの。霧が多く曇天がちで憂うつな都の、博物館の暗い部屋に置くべきものでなく、陽光さん然たるアテネにこそふさわしい(外相の答えの一部)。

さらに、ギリシャ語・英語の通訳を引き受けていたリアニス大使が、英国人のアロガンズ(ごう慢さ)についてのジョークを、外相の許しを受けてつけ加える。「大英博物館のカリキュアティデス(六体の女神像)の一つの上に(これもエルジン卿が運び出したもの)、こんな貼り

紙がしてある。これは六体のうちの一つで、残りの五つはアテネの方に持っていかれている」と。爆笑が起こった。

この時、ロイターの記者が質問に立った。簡潔で見事な切りかえしであった。関係良好で摩擦なしとの話だったが、この問題はギリシャと英国(英国とギリシャとは言わない)にとって、実際にどの程度の重要性を持つのか? また倉成会談では、日本-ECの枠組みの中でどのような話をしたか? 来年後期、ECの議長国を務めるギリシャとしてどのような立場を示したか?

が、外相もさるもの。「明らかに、返還のため戦争を辞さないというようなものでは決してない(笑)。が、あれらは意に反して出国させられた(embarked)もの。担当のメルクリ文化相は、英国の芸術家やインテリとも関係が深いので、成功するものと思っている」「アンチ・ダンピング措置で、ギリシャは他のEC諸国と立場を異にしている、EC議会の議長として再来日し、日本-EC間の摩擦緩和に務めたい」【九月一日(金)記者会見 司会 久木保委員 通訳 キャサリン・スタリリング(英・日) 出席 四八人】

V・フィンボガドチル アイスランド大統領
 昨年の米ソ両首脳のレイキャピク会談の際、テレビに映った美しい家並の国を

代表するにふさわしい、銀髪の女性大統領である。八四年には無投票で再任されているが、最初(八〇年)の時は三人の男性候補を破っての当選だった。負けた方も、こういう人が相手なら「男兵利」というものかもしれない。終始、品のよい英知と親しみやすい笑顔をやささない。

「I have a terrible stage fright」(大変な舞台恐怖症なの)と笑う。が、スピーチや質問に対する答え方をみると、どうして大変な舞台映えのするゲストである。この会見で、大統領は、北欧五か国



(デンマーク、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、アイスランド)が、今秋から明春にかけて、全国各地で行う文化プロジェクト「スカンジナビア・ツデー」の開催を宣言した。

関係国の記者からは、プロジェクト全体の予算規模や、日本側協賛各社との費用分担について質問が出た。同席の北欧閣僚理事会のエダム理事は、「各国単独のものや日本側の数字は持っていないが、同理事会の予算だけで八〇〇万クローネ(約一億六千万円)」と答えていた。

大統領も、「世界に向けて自分たちの声を発するのは高価につくが、それは私たち自身のアイデンティティーのためにも重要なこと」「アイスランドの文化、芸術の紹介は、間接的に主要産品のタラを宣伝し得るが、その逆はありえないでしょう」と。【九月一日(水)記者会見 司会 有馬真喜子委員 通訳 横田謙 出席 七〇人】

盧泰愚 韓国民正党総裁
 「今日は、大統領候補としてはなく、六・二九宣言を断行したものととして招かれています。この次には、そういう宣言はないだろうと思いますが、宣言がなくても、その時はなにとぞまた招待していただきたい(笑)。韓国語と日本語のテキストを用意したスピーチに入る前、このようなあいさつをつけ加えた。土曜の昼食会開催が決定し、案内を発

クラブゲスト



送したのはその週の月曜だった。十七日午後来日予定が、ノースウエスト機のエンジントラブルでアンカレッジへ緊急着陸。一日遅れて十八日午前に着いた。一泊二日のスケジュールの中で、中曽根総理、ニューリーダー各氏らと会談。クラブの昼食会終了後直ちに成田へ。

強行日程にもかかわらず、表情は明るく余裕を感じさせる。スピーチの後、五〇分間で八人の質問者がマイクに立った。厳しい問いにも正面から答えた。例のスマイルをたやまず、総裁の立場からして決然とすべきところは決然として。大統領選、民主化、五輪開催のいずれにも強い自信を示した(質疑は記録版に)。

八人目の質問者には次のように答えた。「スリー・キムの中で誰が一番強いかというのは、答えを期待しての質問ではないだろうと思うが、国民から正しい審判を受ける自信のある方は三人のうち誰でも、三人全

員でも結構だということだ。

記念署名は見事な筆で、「夢も痛みも国民と共に」(ハンダグ)。大統領選のスローガンではなく、六・二九宣言を出した精神を説明したくてしたためた、と。

最後に司会者が「多くの会員が集まったのは、隣国として、韓国の民主化に熱い視線を向け、その成功を期待しているあらわれと思う」と、記念の万年筆を贈った。すると、「ペンが剣より強いと聞いています。このことを胸に刻んで帰ります」。(九月十九日(土) 昼食会 司会 浅井泰 委員長 通訳 金詳培 出席 二四七人)

後藤田 正晴 内閣官房長官

中曽根内閣の約五年を、手ぎわよくラウンド・アップした。「二〇〇〇二一世紀に向けて、橋渡しの役割をする仕事師内閣で、国民的課題は的確にとらえた」と。西欧型とは異なる、たくましい福祉社会と、国際社会での政治的発言力強化を企図し、行・財政、税制、教育の諸改革を進めてきたが、いずれも程度の差は



あれ完結はしていない。日米協調、アジア重視の外交方針のもと、市場開放は基本だが、外から見る日本の経済力と国民の生活実感に大きなギャップがある。外国の批判に応えるには、痛みをともなう国内改革が避けられない。「どなたが国政を担われようと、いま日本がかかえている問題は容易ではありませんよ」。

総裁選びと中曽根調整のタイムミングについては、「党則に従って正々とやり、それから先どうなるかは、その時のこと。総理は一切胸中を明かさなない。それはどせい弱ではありません。大変したたかでございます」。「四人とも識見、能力は持っている。やり方の方法や色合いは違ってくるかもしれないが、目標ははっきりしている」。

余人をもって代えがたいというので、次期政権で入閣を乞われたら?の質問にも、あっさり「私は七十三歳ですので、もう結構です」(笑)。中曽根政権での仕事に満足しているのであろう。ミスター・カミノリも、この日はどこか温和だった。(九月二十一日(月) 昼食会 司会 細谷洋一 企画委員長 出席 一六六人)

M・パンゲマン 西ドイツ経済相
自由党党首でもある。政策に明るく政治家としての迫力も十分だ。二国間協定は貿易問題を解決せず、不平等を生み出し自由経済を窒息させるとして、ガット

での多国間協議を重視する、西ドイツの立場を主張した。



「これが成立すれば、貿易政策上で米国が損失をこうむるだけでなく、米国にとって政治的問題になる。ペイトナリーになってほしければ、それらしく扱わなければならない」。

「ゴルバチョフの経済改革の見通しは「抵抗はあるだろうが、失敗のおそれより成功の見込みが大きい。政治的な力の土台になるのが経済力だ、という認識が指導層に出てきた」。

ドイツが日本より叩かれたいのは、世界経済との統合の差と、特定市場・製品に特化しない政策のせいだ、とも。コム問題でも、制限分野拡大論者が勢いを得たので押しもどす必要がある、と。

理づめの話の終わりに、巨体をゆすりながら、「明日は観客として秋場所に参加する。次回は土俵に上がろうと思うが、いかにせん、軽量なので」。(九月二十五日(金) 記者会見 司会 佐藤隆委員 通訳 S・シュルテ 等書記官 出席 四七人)

(女)

とっておきの話

新聞カメラマン

議会取材でのハプニング



西井武好

あろう……」

飛行機の不足を訴え、増産また増産を叫んでいる。左手を腰に当て、右手を高く上げてアジっている東条首相独特のポーズが、いままなお私の脳裏に残っている。

とっておきの話といっても、あまりみっともないことではないから、そつと隠しておいただけのこと。それでもあの戦時中、軍人様の全盛時代に、カメラで陸軍中将の頭を割った話ともなれば、一応みなさまの興味をそそることになるやも……。

望遠カメラが落下した

時は昭和十九年一月二十四日、太平洋戦争の最中。ガダルカナル島の撤退から一年たち、ようやく日本の敗戦が色濃くなり始めたころ。その後、アッツ島の日本軍玉砕、学徒動員、さては中野正剛が東条首相を批判して憲兵に逮捕さ

れ、その後間もなく割腹自殺するなど、このような背景の中で、折りしも休会明けの翼賛帝国議会が開かれていた時のことである。

当時、私は同盟通信社のカメラマンとして、この帝国議会を取材していた。この日は衆議院の予算委員会が東条首相の冒頭演説があるというので、各社カメラマンは朝早くから予算委員会室のカメラマン席に陣取っていた。私も、カメラに望遠レンズを取り付けて待機していた。

間もなく東条首相の演説が始まった。「本予算案成立の暁には、やがて南冥北冥の地にわが皇軍機が幾千幾百となく飛び交う時が来るで

写真取材を終え、夕刊段階の原稿を送ろうと思ひ、後ろで待機している連絡員に渡そうと、ふと後ろを向いたとたん、私の左肩が取り付けてあった望遠カメラにぶれた。カメラが動いた。そして、五メートル下の傍聴席に落下したのである。

ベタ金の上に血がベトトリ

さあ、大変なことになった。この日は東条首相の演説を聞かんと、多数の傍聴者が詰めかけ、傍聴席は超満員の盛況であった。予算委員会室の一階傍聴席には、有資格者だけしか入れない。

その満員の中へ、上から直径十七センチ、長さ三十センチ、重さ六キロの望遠カメラが落ちたのだからたまらない。緊張していた会場が一瞬さわめいている。だれかがかたづき出されているようだ。廊下から、数人の守衛がカメラマン席へとんできた。だれかに負傷させたかも。しいや頭を直撃して、もしや？。私は、一瞬気が転倒せんばかりになった。

守衛に呼ばれて、院内の医務室へ連れられて行った。途中守衛に「どなたに当たったんですか」。守衛は「名前は分からないが陸軍の将軍様の頭に……」。えっ頭に？それで「分からない、とにかく医務室へ行ってみなければ……」。

こわごわ医務室のドアを開けて中に入った。真っ白いカペーのついたベッドの上に、カーキ色の軍服姿の人が横になって、医師の治療を受けている。顔は見えない。肩章を見るとベタ金に星がふたつ、陸軍中将である。そのベタ金の上には血がベトトリついている。これはかなりの重傷かもしれない。だ



写真は、筆者のカメラマン人生での思い出の作品。昭和34年4月10日、たった一人のモデルとして、皇居内賢所で撮影したもの。あらかじめセッティングした三台のカメラを使った。

が幸い、意識はしっかりしている
ようである。医師と何か会話をか
わしているようだ。

一応治療が終わったところで、
陸軍中将の前へおそるおそる出
た。「申し訳ありません。私の不
注意で、閣下にこのようなケガを
負わしてしまって……」と最敬礼
で謝った。ところが、一喝を食う
かと思つて覚悟はしていたがさら
にあらす。「自分のキズは残い、

君は職務を続けたまえ、東条首相
の写真をとり続けるのだ……」
と、なかば命令口調の返事が返っ
てきた。戦場を地で行くような中
将の言葉に、私は二度目のビック
リ。「申し訳ありません」。再度最
敬礼をして医務室を出た。

被害を受けたのは、宮城県選出
の衆議院翼賛議員、高木義人陸軍
中将と分かった。キズは右上頭部
打撲および裂傷で、全治二週間と

の医師の診断のようだつ
た。

古野社長もお見舞いに

問もなく本社から政治
部長や写真部長がとんで
きた。衆議院事務局室で
何やら話し合いが行われ
たようだ。幸い、私のベ
ナルテイーは、比較的軽
いもので済んだ。被害者
の陸軍中将様のご慈悲が
あったのかもしれない。
もちろん、始末書提出
はのがれられないとこ

ろ。本会期中、本院出入を停止
し謹慎せしむる」という、守衛長
から時の衆議院議長岡田忠彦宛の
報告が出されて、一応のケリがつ
いた。

その夜、同盟通信社の古野伊之
助社長が、南方から届いたとつて
おきのウイスキーを持参して、九
段の偕行社に宿泊中の高木中将を
見舞いに行つたことを聞かされ
た。

私はいまでもあの時のことを思
い出すと、背すじに水が走るよう
な思いがする。

あの時、もし望遠カメラが陸軍
中将の頭を直撃しておれば、それ
こそいちころのところであった。
右頭部をかすめただけで床に落ち
たのは、全く不幸中の幸いという
もの。

もし、今様の国会でこのような
過失事故をおこしたなら、どうな
ることであろうか。「やれ過失傷
害だ」「後遺症が残るかも」「上
司の監督不行届だ」とかなんと
か。「オレのキズは浅い、君は中曾
根首相の写真をとり続ける……」

なんていうセリフが果たしてはね
返ってくるだろうか。まあ、戦時
中の話である。

余談。その後旬日を経ずして、
私は陸軍報道班員として、北千鳥
列島へ従軍の途についた。

輸送船団を組み、北海道の小樽
港から厳寒の北の海へ航行した。
しかも北千鳥特有の濃霧の中を……
。僚船はことごとく、敵潜水艦
の攻撃を受けて沈没していった
が、私たち報道班員を乗せた老朽
船だけが、なぜか目的地に到着す
ることができた。

人間の運命の岐路はいつ、どん
なところで現れてくるものか分か
らない。これにまつわる興味深い
話もあるが、次の機会までとつて
おきましょう。

にしい、たけよし会員 大正四年高知県出身。電
通、同盟を経て、戦後共同通信社へ。その間、一
貫して写真部に所属。昭和三十九年KK共同事業
局へ。五十一年取締役退任。

平河キャップ

ワーキングプレス

十月某日。

午前六時半起床。五時間足らずの睡眠続きとあって頭はすっきりしない。目をこすりながら朝回りの車に飛び乗る。運転手氏に行き先を告げ、各紙朝刊にざっと目を通していると思くなってきた。車中で横になり、仮眠。

午前八時過ぎ、担当派閥の実力者A氏宅に到着。他紙、テレビの記者数人と待つ。三十分ほどしてA氏登場、共同取材が始まったが、どことなくA氏の発言の歯切れは悪い。答え方や表情、前日の表現との微妙な差などから同派の多数派工作は必ずしも成功していないようだ。取材といっても私邸懇談ではメモはご法度。発言内容は正確に頭に刻み込んでおかねばならない。

午前九時半懇談終了。直ちに電話でA氏の懇談内容を政治部デスク、キャップに伝える。社では他派閥担当者からも入ってくる情報を総合的に判断して、A氏の発言の趣旨も総裁選の本記の記事に取り込まれる。ただこの日は弱気な

発言もあったため、「〇〇派首脳発言」として別稿でも掲載されることになった。出稿後、派閥事務所朝食会の取材。引き続き議員会館へ。

自民党総裁選の告示は十月八日。その前後の平河クラブ（自民党担当）所属記者の午前中の行動を、日誌風に描けばこんな風になるだろう。実力者の動静、極秘会談などが総裁選の行方を決定づける。

密着取材と情報の交通整理

中西晴史

そのため、担当者は片時も目を離せない。びったりマークして時にはカーチェイスも。敵もさるもの、車をホテルの駐車場に置いて別の車に乗り替える。カゴぬけで対抗することもしばしば。

さらに実力者に密着しているだけでは情報は限られる。側近議員らカバリーの必要な範囲は広がる。総裁選期間中、開店休業状態の霞が関の役所担当記者が助っ人とな

る。文字通りの政治部の総力戦。時にはライバル社の友人の応援を受けることもある。特ダネに類する情報は無論明かさないが、例えば原稿を書いている間、

ノーカバリーとなった実力者の動静を他社の記者に教えられたり教えたり、といった具合だ。メモのとれない懇談内容をチェックしあうことも多い。疲労した者同士が記憶をふりしぼって発言内容を思い起こす。激しい競争と同時に

時に「戦友」意識のようなものも生まれ、相互扶助の態勢が何となくでき上がる。

総裁選の行方を紙面にする場合、迷うのが、だれのどの発言をもっとも重視するか、という点だ。一線の担当記者から様々の情報が入ってくるが、派閥によって、また派閥内部でも人によって現状認識や見通しで食い違いが出てくる。情報の取捨選択は社で部長、デスクが当たり、出先ではキャップが責任を負うこととなる。キングメーカーの田中元首相不在の久しぶりの総裁選だけに、

情報の交通整理が決定的な意味を持つ。慎重な紙面づくりが必要だが、あまり慎重だと出し抜かれる。きわどい選択をしながら的確な紙面を要求される。

この会報が読者諸兄の手に届くころにはすでに告示日も過ぎ、総裁選の構図もはっきりしていることだろう。安竹宮三氏の立候補で十五年ぶりの本選挙に突き進んでいるのか、話し合い調整が進んでいるのか、はたまた予想外の二階堂氏の出馬となっているのか。

ここはへたな予測は避け、総裁選取材の一線記者の苦勞の一端を紹介することにとどめたい。



安竹宮（最後）に笑うのは誰か？中曾根調整の行方は？（8.30 軽井沢）写真 日本経済新聞

なかにし はるふみ 一九七二年日本経済新聞入社 大阪経済部 京都支局を経て八一年三月から政治部、八六年五月から二度目の自民党担当

土井委員長訪米

ワーキングプレス

全世界が注目する米ソ外相会談の真つただ中、社会党の土井委員長はワシントン、ニューヨークを訪れた。九月十三日から約一週間、持ち前の頑張りで過密スケジュールをこなしたものの、団員も同行記者団(十三人)も、とにかく「疲れた」旅だった。

会談の冒頭を見てブリーフを待つ間、名所見学に余念のない私たちを「いいわね、いろいろ見て回る暇があつて」とにらみつつ、土井さんは、滞在中、延べ四十人以上の上下両院議員との会談のため、リムジンで駆け巡った。

とはいってもそこは女性、いくら忙しくても気になるのは服装だ。シュルツ國務長官との会談では「一番最初の会談だから、一番お気に入りの服を着なきゃ」と、ワインカラーのスーツに紺のブラウスという、日本でもおなじみのスタイルで臨み、その後も毎日、スーツを変える気配り。シュルツ会談後など、「シュルツさんて、目がきれいでステキ」と、日本では決して聞けないセリフでしばしば

つとりする土井さんに、こちらの方が目をパチクリ。相当高揚していたらしい。

もつとも、土井さん自身は今回で七回目の訪米とあつて、議員には顔見知りも多く、土井さんが議員バッヂをあげたこともあるソラーズ下院議員とは特に仲良し。ソラーズ氏の部屋の前で二人が肩を抱くようにしてカメラにおさまると、スタッフが「彼女は(ソラーズ

おじやま虫も疲れしました

大久保 文代

氏の)「ドナ・ライズだ」とひやかす、爆笑になった一幕も。こうしたくだけたムードも手伝つて、ワシントンでのミス・ドイの個人評は「とてもクリアでシャープ」、つまりハキハキした口調と押し出しの良さがウケて、すこぶる良かったのだ。

それだけに、ニューヨークでの市民との交流で、ミスが重なったのが惜しまれる。言い訳にはなら

ないが、土井さんとはかくくたびれていた。ジャボンソサエティの英語講演に備えた発音の特訓や、翌日の会談の準備で連日、三時間睡眠。おまけに出発前のカゼが日に日に悪化し、ニューヨークでとうとう発熱、ジャボンソサエティのレセプションからホテルに戻るなり、ベッドに倒れ込んでしまった。「しんどい、しんどい」と言いながらもハードな日程をこなしている日本での土井さん

に慣れつこの我々担当記者も、今度ばかりは「いつ倒れるか」「あと一日もつだらうか」とハラハラし通して、原稿より

も(？)気疲れしてしまった。同行議員も同じ。肝心のブリーフが会談途中で一度ならずいねむりしたため、ブリーフがあいまいで「ちゃんとやって下さいよ」と詰め寄る私たちと険悪なムードに。

今回の記者団は米ソ外相会談、中曽根首相訪米準備で戦場のようなワシントン、ニューヨーク両支局のいわば「おじやま虫」。肩身の

狭い思いをしながらも送稿に追われ、「過労」の土井さんとは同行しながらろくに口もきけない状況とあつて、自然、プレスルームはグチ、不満のこぼし合ひの場。

最終日の夜、イタリア料理で打ち上げた訪米団と記者団は、ミュージカル「コーラスライン」を見るため、ブロードウェイへ繰り出した。土井さんたつての希望で苦勞してチケットを手に入れたのだが、約二時間の上演中、土井さんはじめほぼ全員がぐっすり眠りこけてしまった光景を、周囲のアメリカー人が不思議そうに見ていた。きつと今頃、うわさになっているだらう。



ニューヨークのハンマーカシ小学校で。9.18 写真 AP

おおくほ 八五五、九八二年就労新聞人仕業同支局を降て八五年本社政治部 昨年九月から野党クラブ担当

タテホ化学

ワーキングプレス

「そんなアホな！」

と同時に、「とうとう出たか」。

ファインケミカルの中堅メーカー、タテホ化学工業（本社・兵庫県赤穂市）が財テク失敗で債務超過に陥るとの一報を、大阪証券取引所担当の記者から受けた時の実感だ。

「そんなアホな」は、資本金二十四億円余り、年間売上高六十億円足らずの企業が債券先物投資で一十億円もの取引を行い、約二百億円もの損失を出したという信じ難い出来事に対する

驚きであり、「とうとう」は、日頃から、メーカーが本業のモノをつくることを忘れ、カ

ネがカネを生む財テクに狂奔する昨今の風潮を苦々しく思い、「そのうち、とんでもないしっぺ返しを受けるのでは」と予想していたからだ。

さっそく取材合戦がはじまった。タテホを倒産させるのか、否か。カギはメイン銀行などの態度で決まる。金融担当記者として銀行幹部宅への夜回りが続き、同僚記者も赤穂市へ急行した。

財テク報道の教訓にも

この結果、債券先物の取引額は一千億円にとどまらず、年商の実に七十倍近い四千億円強、損失も二百八十六億円にのぼることが明らかにしたほか、主幹証券の日興証券へのインサイダー取引（内部情報による取引）の疑い▽財テク資金を提供した金融機関の責任問題▽第二、第三のタテホ捜し▽タテホの財テク責任者、小林崇起前常務（九月十五日付で解任）の行

西川光男

方不明と小林氏個人の所得隠し発覚——など、波紋は広がるばかり。小林氏はその後九月下旬になつてようやく姿を見せたが、会見で「日興証券が追い証（損失に伴う追加証拠金）さえきちんととってくれているなら（損失は少なく済んだ）」と話した時には、その甘い態度にア然とさせられた。

この取材を通じて、改めて知ったのは、財テクのプロとさえいわ

れた小林氏に、この言葉を吐かせた相場の魔性の怖さだ。

一時は大儲けした小林氏が、記録的な相場の下げ局面でどんどん買い増しし、「もう一度相場が当たれば損も取り戻せる」との思いで、「アプリ地獄」にのめり込んでいったのは確か。

身近な例では、パチンコの負けを取り戻すため、次々と小遣いをつき込んでしまふ心理と同じで、

スケールこそ違っても、甘いささやきのワナに変わりはない。

だが、財テクそのものは悪いことではない。いや、健全な財テク、財務

テックノロジーは、金融自由化が進展する現在、資金の効率的な運用・調達を行うためにも企業にとつて重要な財務戦略となる。しかも、政策的に円高路線が推進されてきたここ二二年間、業績不振を財テク収益で補ってきた輸出関連企業も多く、好きで財テクをやっているわけではないが、円高不況で倒産するよりは、と訴える経営者も多い。

こうした企業の多くはいうまでもなく、万一の場合のリスクに備えたチェックシステムを持っている。タテホの悲劇はこれがなかったことにつけるわけだが、この教訓は家庭の財テクにも生かせるものだ。

実は記者自身、「おかねと暮らし」という企画面（西日本版）を週一回担当しており、さまざまなホーム財テクの情報を、読者に提供している。

そこでいつも悩むのがリスクの伴う財テクだ。紹介する時は必ず「これは必ずしも元本保証でない。あくまで余裕資金で……」などと強調する。

「まるでマッチポンプのようだ」と自分でも苦笑することが多いのだが、財テクが「両刃の剣」である限り、今後もこういう声を大きくしていかなくてはと、改めて肝に銘じている。

にしかわ みつお 一九七〇年サンケイ新聞大阪本社入社 整理部 京都支局などを経て八四年から経済部 現在金融担当

マドンナそしてマイケル

ワーキングプレス

「ねえ、今度のマイケルのガード、全然わるいじゃん。一体どうしたのかねえ」——セクシー旋風を巻き起こした六月のマドンナに続いて、幸運にも(？)九月十月と二か月に及ぶマイケル・ジャクソン番に指名された記者たちからは、こんな声があがって久しい。デスクも「連日大変だな。早く帰って欲しいよ」と、早朝から深夜に及ぶ追っかけを気づかされてくられるが、どっこい、現場はそれほどでもない。それというの、マドンナの時がメチャメチャにハードで、それと比べると、優等生、マイケルの取材は「地獄から天国」のような気分だからだ。

単に、マドンナが朝八時に起きてジョギングをやったから、早起きが大変だったというのではない。彼女側のガードは徹底して「マスコミ嫌い」を通じたからだ。とりわけ象徴的だったのは深夜の六本木のデイスコ「トゥーリア」前でのこと「何が報道だ。写真なんか撮らせねえぞ。」と日本人ガードマンがドスをきかせて威嚇。そ

好対照の「ご主人」様

石山

れでも、なおかつ撮影したカメラマンには、専属の黒人女性ガードマンのリーチある手が伸びてカメラを叩き落とすわ、日本人ガードマンも撮影者を振り回すわ。流血騒ぎにこそならなかったものの、当時、暴力事件で米国の自宅に待機していた夫ジョーン・ベンが目の前にいる錯覚を起こしたほど。余談ながら、本紙は被害ゼロだったが、過激が売り物の夕刊紙

Tでは、一連の取材で七個のストロボが壊されている。

そんな経緯があっただけに「奇人」と伝えられていたマイケルに對しても不安があったが、噂は全くのウソ。本人は二十九歳ながら「ミッキーマウスのような童心」を持っていて、連日の取材を通し肌で実感できた。

チンパンジーの同行でまず好感を持たせた上、遊園地に行ったり、

裕

オモチャ屋へ行ったり、富坂署にお礼のあいさつに行ったり。嫌な顔一つせず、どこへ行っても「マイケル」のコールに手を振ってこたえる紳士ぶり。彼の周りには、巨人のサンチェのような二メートル近い大男の黒人ガードマンをはじめ、三人の専属ガードマン、そして、くしくもマドンナの時と同じガードマン会社「東京パトロール」が当たっているが、万が一に備える時の目こを敵しいものの、我々取材陣にも過剰なガードは一切なしだ。

マイケルにすっかり感化されたのか、マドンナの頃は目を釣り上げればなしだった。東パトのI社長も笑顔が絶えない。そして、「やりにくいんだよね。我々にもプライベートに關しては動く直前にならないと教えてくれないからな」と、やりにくいと言いつつも、企業秘密(？)まで打ち明けるほど。「国民はそれにふさわしい宰相を持つ」といわれるが、「ガードマンは主人にふさわしい行動をとる」といえるのではないか。かくて、ふだんはお行儀の悪い、我々取材陣までも目重気味の毎日である。そんなわけで、今回は苦勞らしい苦勞はない。いま思うのは、プロ野球の「ホーナー効果」のような「マイケル来日効果」である。何しろ、マイケルといえば知名度ではレーガン大統領と並ぶ存在。とりわけ、日米経済競争、コロム違反で対日批判が厳しい中、マイケルが「日本人は約束を守る人間。決して攻撃的ではない」と、帰国後会う人ごとにアピールすれば、その広告効果は絶大である。



コンサート会場の警備を担当した富坂署を表敬訪問(9.24) 写真 スホニチ

いしやま ゆたか 一九七七年スポーツニッポン新聞東京本社入社 八三年から文化・社会部

スタジオ訪問

信越放送

「SBC特集」

10月から
ゴールデンに

十月六日、信越放送はゴールデンタイムに「SBC特集」(火曜 午後七時三〇分/八時)を登場させた。この時間帯に自社制作番組を放送するのは、長野では初めてだ。

同社は、十二年目に入った夕方のニュースワイドの他に、年間二〇〇本以上の単発番組を制作している。選挙速報、スポーツ、音楽会中継、対談、県の広報番組など内容は多種多様。そんな中で、今年四月、土曜午後零時四〇分にドキュメンタリータッチの情報番組をスタートさせた。この番組が放送開始六か月で、第一級の時間帯を獲得したわけだ。

「十三人のディレクターで、年間二〇〇本の単発番組を作るのは確かに大変です。しかし——」と伊藤隆徳報道制作局長は言う。「もっと作り手が主体性を持ち、主張をこめられるような情報番組が

欲しかった。ローカルワイドニュースと共に軸になるものを作りたかった。客観的なニュースと、地域住民の立場で見た情報の提供が、ローカル局の存在意義だと思います」。

奥様向けのワイドショーや、カメラを外に出して視聴者を参加させる「街角テレビ」などのアイデアもあったが、編集による正統派の情報番組を選んだ。営業的には「売りやすいタイプのものではない」。

「制作サイドはもとより、営業も含めて会社全体が協力して生まれたようなものですね」と内山洋道制作部副部長。実際の制作は、制作、報道、映像(カメラ)、アナウンスの各々が共同で当たる。専任ディレクターを二人置いてはいるが、専任にはこだわらない。これまでもカメラマンが責任者になったものや、支局が中心になって作ったものもある。月に一度の企画会議には、制作担当の他に営業、編成、東京支社からも人が出る。ここでの議論をベースに、制作担当者がミーティングを重ねていく。

この半年間にオンエアしたのは「ルポ塾事情最前線」「東日本鉄道長野支社営業課」「老いの村」などの社会もの、「春は信濃路 ラーメンマップ」などの情報もの、「木曾馬の里」などの話題ものと、テーマは幅広い。

中でも六月二十七日放送の「素足の花嫁たち——ある国際結婚」は大きな反響をよんだ。嫁不足に悩む農家に、スリランカの女性を紹介する上田市の結婚斡旋業者を追ったものだ。「嫁に来てくれるなら日本人でなくても」という独身男性たち。原地の新聞広告を見て応募してきたスリランカ女性たち。集団見合いでハシ袋の裏に、気に入った女性の番号を書くように促す業者。一度の見合いだけで生まれていくカップル。説明を聞くため業者を訪ねる各地の村の幹部たち。やるせない現実を追って、担当の内山さんは、合同結婚式を取材するため、カメラマンとコロomboへも飛んだ。(写真)

「まるで人買いだ」という業者への怒りや、「なぜこんなものを放送するのか」という局への抗議が殺到した。視聴者だけではなく、社内でも議論をよんだ。「我々の間でも、はっきりとした結論は出ていません。しかし、少なくとも、問題提起をして地域に議論を起こすことは良いことだと思っています」と伊藤さん。内山さんも「デリケートな問題でも、思ったように作らせてくれる土壌が社内にあります」と言う。

柔らかなものへの反響もある。「ラーメンマップ」は、視聴者から寄せられた情報をもとに制作した。県内のおいしいラーメン屋の総カタログだ。工場でのめ

ん作り工程の段階から検証して、個性あふれる「ラーメン」を取材した。その全部の店を紹介した地図を作ったところ、千二百通を超える申し込みがあった。

ゴールデンタイムに移っての第一回は「検証リゾートブーム」。大資本主導型の開発が続く、リゾート県としての長野の光と影を追った。菱山晋一専任ディレクターは、東京の大手開発業者や、岩手の新興観光地・安比へも取材のため赴いた。

「今後も、こういった社会性の強い、骨太の番組を作っていきたい。また、反響の大きなものは、どんどんアンコール放送をしていくつもりです」と、伊藤さんは言う。

(河野 聡)



スリランカで行われた6組の合同結婚式



▼九月初め、記者時代からの仲間で、現在それぞれ大学の先生をしている阪口昭（日経出身）、野村耕作（サンケイ出身）の両君と三人

で、東ドイツとハンガリーを駆け足で回って来ました。称してジャカデミー（ジャーナリストティック・アカデミズム）ミッション！

ベレストロイカ（ゴルバチョフ改革）に対応して、東欧諸国が自らの改革にどう取り組んでいるかを見てくるのが目的。わずか十日間余りの日程でしたが、

ポスト・カダルの有力候補の一人であるハンガリーのベレツ政治局長（四年前に来日の際、当クラブで記者会見）をはじめ、政治、経済関係の要人クラス、大学教授、ジャーナリストたちと話し合うことができました。

東ドイツでは、ちょうどホーネッカー議長の下ドイツ訪問の時期にぶつかりましたが、ベルリンを東西に分ける壁の白さが、秋空の下でやけに目にしみました。

また、政治的にはソ連圏のメンバーとしての分（ぶん）を守りながら、経済面では早くから資本主義的手法をとり入れた改革を進めてきたハンガリーも、失業者

の発生を覚悟の上で、実力以上の生活水準への切り詰めに、ナタを振るわざるを得なくなつたようです。秋の日がきらめくドナウの水際は、いまは静かなように見受けられましたが……。

（共同通信出身 平田 真巳）

▼信濃毎日新聞東京支社は、中央区銀座の北野ビルから、同区築地の完成したばかりの築地三井ビルに移転し、九月二十一日から業務を始めました。この移転を機に、通信機材や諸設備も一新し、情報の集中する首都圏での取材・営業活動を一層強化することになりました。もうひとつの大きな変化は、これまで約三十年間

も二つの階に分かれていた、編集・営業・庶務の各セクションをワンフロア化したことです。

この結果、独自の活動分野、手法を持つ他の領域を、背中合わせのところまで垣間見ることもできるようになったわけですが、このことが、それぞれの仕事にどのような新たな刺激効果をもたらすか、興味を持たれます。もともと個性豊かな集まり。仕事が一段落したときなど、ジョークやそのジャブが隣のセクションとの間で早くも飛んで、しばしなごやかな場面も……。

新住所 104 東京都中央区築地四一七

一 築地三井ビル五階

☎ 〇三―五四五―三〇〇〇

（信濃毎日新聞東京支社 斉藤 治雄）

● 囲碁の会 ●

九月二十六日の例会も、五月以降五回連続の雨模様。植草甚一流なら、雨降りだから碁でも勉強しようとなる。案の定集まり具合は上々で、初参加一人を含めて23人、総対局数も52局。

吉沢正也六段、橋本正邦五段、大日向一郎四段、山崎政人四段、相川誠一二段、石川基二段、広田耕司初段が優秀な成績をあげた面々である。次回は十月二十四日（土）午後一時から。

プロファイル

◆ 法人・個人賛助会員

笠置さんとチェロ



笠置正明元事務局長の召天一年記念会

九月十二日、日本記者クラブで笠置さんの「召天一年記念の集い」がもたれた。

前日までの残暑が、急に涼しい秋風に変わっていた。

笠置さんが生前グループの一員だった「ユーフォニック」「東大OB会」の二つのコーラス団が、薄暮の日比谷公園を背に、天使のハーモニーを響かせた。「この素適な歌声と八千代夫人の涙は、きつと天国の笠置さんに届いたことでしょう」と進行役の桜井良子さんは声をつまらせた。

聴きながら、ふとあのチェロのことが思い出された。

笠置さんが事務局長を退任する時、理事会が記念品を贈ることになった。彼の希望するチェロを求めてご一緒した新橋の楽器店は、目立たないビルの二階にあった。

陳列してあるさまざまな楽器の値札を見てただ驚いているだけの私に気を配られたのか、決断までの時間は意外に短かった。

「これに決めさせてもらおうよ」
笠置さんらしい言葉づかいとちよつとはにかんだ笑顔を憶えている。

この日いただいた「愛隣人 笠置正明の想い出」という追悼文集によれば、笠置さんはパリに赴く前、遠山一行氏の子息にチェロのレッスンを受け、パリでも時に興じて弾いていたようだ。

新聞、音楽、銀座教会、八千代夫人——笠置さんの交友関係はこれらを核に想像を越えて広い。そして相愛の夫婦像と家庭——召天一年の記念の集いで、私はなんだか笠置さんが遠い人に見えるのである。

村上重美（日本新聞協会業務部長 前日本記者クラブ総務部長）

紹介合会

- 1日▽エネルギーを考える会（長岡昌会員）
- 4日▽時事OB懇親会（時事 石川謙次郎会員）
- 5日▽ポール・チュール ヒューストン大 学教授記者会見（国際 PR 小林大二会員）
- 7日▽「エキスポ'88」セミナー 豪州ブリスベーンで開催される万国博の記者説明会（豪州大使館 武田吉朗会員）
- ▽科学論説懇談会 「異常気象と気候変動」松野太郎東大教授（読売 中村政雄会員）
- 8日▽座談会「瀬戸大橋」山根孟本四公団総裁、柴田譲同公団元副総裁、磯村英一都立大名誉教授、伊藤学東大教授（山陽 赤井克巳会員）
- 9日▽国際問題研究会（共同 白田昭三郎会員）
- ▽座談会「北海道における公共料金の問題について」横路孝弘北海道知事、服部経治運輸省事務次官、児島仁NTT副社長他（道新 戸原文雄会員）
- 10日▽「世界の農業問題」シンポジウム A・シマントフ元OECD農業局長、速水佑次郎青山学院教授他（OECD広報センター 水谷薫会員）
- ▽民放解説者研究会 三塚博衆議院員（朝日放 岡村黎明会員）
- ▽スポーツ 六紙懇談会（日刊スポーツ 三浦勝男会員）
- ▽民報協記者研修会（TBS 中村欣資会員）
- 14日▽入社試験（東京ニース 藤川宏会員）
- 16日▽在京岩手産業人会（岩手 阿部龍也会員）
- 17日▽民放地方局懇談会（民放連 泉長人会員）
- 18日▽日米記者交換計画歓迎レセプション（協会 宝子山幸充会員）
- ▽全学新（旧全日本学生新聞連盟）OB会（朝日 富永一豊会員）
- 21日▽座談会「高輪化社会への対応」日下公人経済評論家、芳賀徹東大教授、上條宏之信州大教授（信毎 斉藤治雄会員）
- 22日▽著作権研究会（NHK 田中信義会員）
- 24日▽新聞広告を考える会（京都 高橋邦次会員）
- ▽「日中正常化十五周年」記念座談会 二階堂進前自民副総裁、野田毅自民政調副会長、嶋倉民生愛知大教授、舛添要一東大助教授（西日本 石崎憲司会員）
- 25日▽レジャー記者クラブ総会（報知 遠藤徳貞会員）
- ▽同盟・中国の会 中国各地に駐在、従軍した元同盟通信の人たちの集い（坂田二郎会員）
- 28日▽全国新聞編集者会議（時事 守屋正恒会員）
- 29日▽英文編集者会議（協会 田村進会員）
- ▽対談 長岡實日本たばこ産業社長・竹中一雄国民経済研究協会会長（日経 新井淳一会員）

（会員がクラブ施設を利用して行った主な合会です。九月の総回数は一・二・四回でした。）

写真部

写真 森 和 也 (時事通信社 写真部)



首都高の葛飾-江戸川線完成記念の「のんびり走ろう会」。地元住民1,800人が参加した(9・6)

一極集中のロス

首都高速ができて何年かは、新宿から竹橋の新聞社まで六分で行けた。時計とにらめっこで走っていたから覚えている。放射線が広がり、東名高速や中央高速とつながるにつれて渋滞がひどくなった。いまは二六時中、その一〇倍かかる。ブレーキとローギヤーしか使えない。同じ状況の他の路線も含め、空しく浪費される時間、神経、燃料の総量たるや大変なものである。いまだき「首都高速の渋滞に出合っ」というのは、遅参の言い訳にもならなくなった。言い訳に不可欠な偶発性が皆無だから。

公団の怠慢を責めても仕方がない。役所も企業の本社も千代田、中央、港の三区に集中し、ヒトはこの三区へ向かって走る。近県も含めて何千万人の胃袋を満たす魚や野菜が、全国から都心の市場に集められ、また出ていく。これが渋滞の元凶である。

北へ行く下関ナンバーの冷凍車が、西へ向かう千葉ナンバーの野菜トラックが、なぜ銀座を通らねばならないのか。パリでもウィーンでも、ループとかリンクとか呼ばれる環状道路が何重にも取り巻いていて、都心に通過交通はない。卸市場は郊外に置いてある。

オリンピックや万博などを、あれほど完璧にやっけてのける日本人だが、都市づくりとなると、てんでだらしない。(林芳典)

会員名簿をご確認願います

新しい会員名簿を作成し、お届けいたしました。落丁、乱丁などがありましたら、お取りかえいたしますので、お知らせください。

例年、発行した名簿にその後の変更を加え、新名簿用の原稿を作成します。お手元の会員名簿で自分のところをご確認いただければ幸いです。誤植などお気づきの点がありましたら、(五〇三)二七二二で事務局の長谷川または河野までご連絡くださるようお願いいたします。

盧民正党総裁のスピーチテキストと

「土地」研究会の資料があります

盧泰愚韓国民正党総裁昼食会のスピーチテキストと、清水達雄国土庁官房長が研究会「土地を考える」のために準備した資料のオリジナルがありますので、ご希望の会員にはコピーを作成いたします。9階の受付へお申し出願います。

コーヒー、紅茶には

喫茶券をご利用ください

昼時のラウンジは大変混雑いたします。コーヒー、紅茶、ソフトドリンクを注文される際は、できるだけ喫茶券でお願いいたします。一冊20枚つづりで、二、四〇〇円です。レジでおもとめ願います。

寄贈書

愛隣人 笠置正明の想い出
 変われ日本人 甦れ企業
 経済大国ニッポンに明日はあるのか
 笠置八千代
 堀 紘一
 マンリオ・カデロ

ゲスト・カールト

第9回欧州記者研修参加者
 (新聞協会 10・10と11・20)
 イザベル・ベシュレー(仏 アンテニス・ドゥ)
 マティアス・ナス(西独 デイ・ツァイト紙) ス
 テリオス・クログラー(ギリシャ アンティ誌)

クラブ訪問者

9月25日 アルトロ・ポロ
 ジャール フォリピン・ス
 ヨナル・プレスクラブ会長

展示会の招待券 朝日新聞社から「東京芸術大学創立一〇〇周年記念展」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

訂正 九月号会報の『会員の著書』欄中、「原子力その不安と希望」の岩本康氏は岸本康氏の誤まりでした。おわびして訂正いたします。

十月一日現在の会員状況 法人会員 一四三社 基本会員 九一六人 個人会員 一、三六六人 法人・個人賛助会員 七六社 二三九人 特別賛助会員 七三人 名誉会員 一六人 計 二一九社 二、三一〇人

十月の行事 (5日現在)

- 6日(火) 午後4時～5時 宮沢喜一衆議院議員 記者会見
- 7日(水) 午後1時30分～2時30分 竹下登衆議院議員記者会見
- 9日(金) 午後4時～5時 安倍晋太郎衆議院議員記者会見
- 13日(火) 午後1時～2時 マハデイ スーダン 首相記者会見
- 14日(水) 正午～午後2時 澄田智日本銀行総裁 昼食会
- 19日(月) 午後2時～3時30分 シリーズ研究会 「土地を考える」(Ⅱ) 大崎本一東京 都市計画局長
- 21日(水) 午後3時～4時30分 研究会「宇宙開発のフロンティア」大沢弘之宇宙開発 事業団理事長
- 22日(木) 午後4時30分～5時30分 米国州議会 議員一行記者会見

会報委員長 深川 誠
 委員 林 利隆 三好崇一 松井 章 東郷茂彦
 連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二